
ラッセルカ

そらみみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラッセルカ

【Nコード】

N9448C

【作者名】

そらみみ

【あらすじ】

ラッセルカはひとりです。でもひとりとは感じていません。ひとりって事を孤独って事をしりません。出会いがなければ気づかないかもしれません。

ラッセル力はおんなのこ
長い黒髪
金の瞳

ラッセル力はひとりが好き
部屋の中で
本さえあれば

ひとりで生きていける
誰ともはなさず
誰とも会わず
悩むことも 傷つくこともなく

ラッセル力のおうちは森の中
小鳥のさえずり
川の音

全部が完結しているようで
まったくもって
なにかが欠けてるようで

今日は森をおさんぽ
そして出会った
見知らぬだれか

これから始まる

そんなおはなし

- - - - -

ラッセル力はひとりが好きです

誰かと会うなんて事は週に一度

作ったレースを村の生地屋さんにかつてもらい

新しい材料や食べ物を買うために森を出るときくらいです

昔は生地屋さんもいろいろ話しかけてくれた気もするのですが

ラッセル力があんまり無口なもので今ではもう話しかけてはくれません

始終そんな感じですから

ラッセル力には親しい友達がいません

でも

今までずっと そうでしたから

それがラッセル力の普通でした

ラッセル力はおさんぽが好きです

本で読んだことを 頭の中でぐるぐる考えながら

鳥の声や 水の音

ちよつと涼しい風の中を

歩いていくことが好きでした

それが全てでした

そこにいるように

まるでいないような

そんな毎日でした

今日もラッセル力はひとりで森を歩いています

さっきまで読んでいた本のことを考え考え

頭の中の世界でひとりで遊んでいました
あまりに頭の中の世界に浸っていましたから
その人とぶつかるまでまったく気がつきませんでした

「？」

なにが起きたのか　しばらく把握できません
相手の人も驚いているようです

「君はいつたいつからそこにいたの？」

少年から青年へとうつろっていく年頃でしょうか
おどおどした態度が　幼さをいつそう際立たせる
色白の青年でした

「・・・」

突然の事と　はじめて見る人
ラッセル力は言葉ができません

「ごめんなさい　君がいるのに気づかなかったんだ
まるで突然　森の中から現れたみたいだったんだ」

青年はしどろもどろになりながら　謝ります
ラッセル力もようやく言葉がでてきます

「おさんぽをしていたの」

やっとそれだけ言えました
でも

その後に　なんといいのかわるで言葉が浮かんできません
何も言えずに黙っていると

「怒っているのかい？」

青年がおずおずと聞いてきました

青年も　おしゃべりは　決して得意ではないようです
何処か遠くを見るような　まるで直接話しかけるのは　いけないこ
とだと

そう思っているような話し方です

それでもラッセル力が困ってだまっていると

青年もまた　黙ってしまいました

そして青年は　そのままんだか　怒られたような

そしてちよつと寂しそうな　そんな顔をして

歩いていってしまいました

なんだかラッセル力は　悪いことをしたような気がしました

今までもそうでした

誰とでもそうでした

ほんのちよつと　この居心地の悪い感情

ラッセル力はまた　考えるのをやめて

頭の中の世界に　沈んでいきました

次の日

今日もラッセル力はおさんぽをしています

昨日　あの青年とぶつかったあたりにさしかかります

「あ」

昨日の青年がいました

なんだか ラッセルカに 気づいているのに
わざと知らんぷりをしているような そんな風に
朽ちて 折れてしまった木の幹に座っています

昨日感じた あの ちょっといたたまれないような感情が
またラッセルカに生まれます

そのまま気づかないふりで 通り過ぎようとラッセルカが思っていると

「昨日はぶつかってしまって 驚かせてしまって ごめんなさい
まだ 怒っているだろうか？」

なんだか へんな話し方で 青年が声をかけてきました

ラッセルカは 別に怒ってなんかいませんでした
ただちょっと 突然だったので どうしていいかわからなかった
けでした

「僕 人と話すことが 苦手なんだ はじめてのひとが 怖いんだ
それで 昨日は ちゃんと謝れず逃げてしまった ごめんなさい」

なんだか青年は謝ってばかりです
ラッセルカは困ってしまいました 怒ってなんかいませんし
なにより 自分の方が いけないことをしたと そう思っていたか
らです

ラッセルカはゆっくりと 考え考え やつと

「怒ってなんか いないわ」

それだけ言いました

なんだか たどたどしくはありますが お互いに はじめて 会話しました

「本当に 怒ってないのかい？ 今僕は 変なことを言っではないのかい？」

青年はやつぱり 昨日と同じ なんだか遠くを見ているようにきよるきよるしながら 話していましたが なんだかちよつと 嬉しそうでした

「いいえ 変なことは言っていないわ それに本当に怒ってなんかいないわ

私こそごめんなさい 私も人と話すつて事に 慣れてないの」

ラッセルカも 自分の無口が 相手を怒らせてしまうことがありましたので なんだか この ゆっくりな 手探りな会話が すこし 楽しくもありました

「僕はターマイロ もしよければ 本当に もしよければ 貴方の名前を教えてもらえないだろうか？」

ラッセルカは初めて相手の名前 自分の名前というものを 意識しました

そうです 他者が存在しないのに 今まで名前なんてものに なんの意味があつたでしょう

自分はラッセルカ それさえも あまり重要ではなかったのです

「私は ラッセルカ」

なんだか 久しぶりに 自分はラッセル力だと そう思いました

「はじめまして ラッセルカ ああ はじめましてじゃないか ラッセルカ こんにちはわ」

おどおどと 半ば逃げそうになりながらも ターマイロは一生懸命話しています

「貴方が突然森の中から現れて そしてあまりに消え入りそうだったから

森の精霊にでも 会ったんじゃないかって 昨日あの後 ずっと考えてたんだ」

そして少し恥ずかしそうに

「・・・それにあんまりその瞳が綺麗だったから ますます精霊だったのかわって

その・・・ 今日確かめに来たんだ」

ラッセルカの瞳は金色でした 夕方の 森の木々から漏れてくるような

やさしい金色でした

「私は精霊じゃないわ この森でひとりで暮らしているの」

ターマイロが言います

「こんな森の奥で一人で？寂しくはないの？」

ラッセル力はまた困ってしまいました

寂しいって何だろう？今までずっとひとりでした

本さえあればよかったし 本だけが全てでした

それで 聞いてみました

「寂しい？寂しいってどういう事かしら？私は今までずっとひとり
これっておかしいことなのかしら」

ターマイロも考え考え

「おかしいって事はないけれど・・・ どうなんだろう？そう言われると僕もよくわからなくなってくるね

でも僕はひとりでいると 寂しいって感じちゃうんだ」

そしてターマイロは いろいろ考えすぎてしまって 他人と話すのが怖いこと

だから親しい友達が誰もいないこと 寂しい 一緒に物を観て一緒に緒の感想を持ちたいことなどをラッセル力に話して聞かせました

ラッセル力はこんなに他人と会話をしたのは初めてでした

ターマイロはラッセル力が何も言わなくても不機嫌になりませんそのかわり 始終ラッセル力が怒ってないかどうか確かめますが真剣にラッセル力に話しかけます

いろいろなターマイロの思いをを聞いているうちに ラッセル力はまるで 本を読んでいるみたい と思うました

「ターマイロ 貴方の中にはいろいろな物語がつまっているのね
私ね 今ね 楽しいわ」

ターマイロはびっくりした顔をして そして嬉しそうに言いました

「僕の話が楽しい？本当に？初めて言われたよそんなこと」

そしてそれからしばらくの間　ターマイロは自分が考えていることをいろいろラッセルカに話して聞かせました
その間　ラッセルカが口を開くことはありませんでしたが　とてもラッセルカも　ターマイロも楽しそうでした

「それじゃ　僕　もう帰らなきゃ」

気がつくあたりは薄闇に包まれています
ラッセルカの心に　なにか　おかしい感情が生まれます
ただ単に悲しいわけじゃなく　なんだかわからない気持ちです
でも

こんな時　なんといいのかわからないので　やっぱりラッセルカは黙っていました

「また　会いに来てもいいだろうか？」

ターマイロの言葉を聞いたときも　なんだかわからなくなってしま
って　ただ　コクンと　うなずくだけでした

次の日もラッセルカの日常は変わりません
本を読むこと　おさんぽ　それだけです
ただ　おさんぽの途中で　ターマイロが座っていた朽ちた木の幹で
本を読む

そんなちよつとした変化はありましたが

幾日かが過ぎていきました
ターマイロはやってきません

ラッセル力は今までのように 考えるのをやめようかと思いましたが
何故でしょうか やめようやめようと思いながら ターマイロの事
を考えてしまうのです

自分にいろいろ話をしてくれた ターマイロの一言一言が思い出せ
ます

なにかが足りないと 思いました

それまで 感じていた森と 今のこの森 一緒のはずなのに
川の音や 鳥の声

あの人にはどんな風に聞こえるのだろう
そして

あの人には 私はどんな風に見えるのだろう
その答えはこの森のどこにもありません
答えを持っているのは ターマイロだけです

今のこの森は いえ ラッセル力自分自身は 欠けています
ラッセル力はそう 感じてしまいました

「寂しい」

声に出して言ってみました

「寂しい」

ラッセル力は 寂しくなっていました

こんな事ならば

今まで通りに

ひとりがよかったとか

そんなことを考えていましたが すこしばかりこの孤独は 気持ち
よくもありました

夜に泣きました 何故いままで こんなひとりの夜を 過ごせてき
たのでしょうか

朝がきました 森のいろんなことが そこにありました
ラッセル力ははじめて せかいの存在感を感じました

世界は 森は やさしく そして つめたく ただ 存在していま
した

自分だけが 全てではありませんでした

朽ちた木の幹を目指しました

川の音や 鳥の声 木漏れ日や 風の音 流れる雲や 陽の光

それら全てが ラッセル力に 突き放す冷たさと 包み込む暖かさ
両方をいっぺんに くれました

「ひさしぶり」

ターマイロが座っていました 嬉しい気持ちがあふれます

そしてまた いろいろ話しました

初めて出会った日 ターマイロはこの世界から消えようと 森にい
たことや

ただ 誰かに 会いたって事や ほんのちょっと 認めてもらえること

それだけで 生きていこうと がんばれること

そんないろいろなことを 話しました

「また がんばろうって そう思って やり直せることに向き合って 君に会いに来たんだ」

ラッセル力はターマイロとの ターマイロはラッセル力との そして二人とも森や 世界との

繋がりを感じました

- - - - -
- - - - -
- - - - -

今日もラッセル力は本を読んでいます

「おさんぽしよう」

ターマイロが手を差し伸べます

「おさんぽしましょう」

読んでいた本を置き 笑顔を向け ラッセル力がその手をとります

森はもう 欠けてはいませんでした

（後書き）

習作なので何か感想をいただけると幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9448c/>

ラッセルカ

2010年10月25日02時29分発行